ラジオドラマ再発見

―「因伯千一夜　津黒城主の最后」に見る鳥取の歴史と営み ―

【指導教員】　榎木　久薫　　岡村　知子　　佐々木友輔

【学　　生】　井田　　遥　　大久保　藍　　川原　日向　　清水　　奨　　田中　洸希

田中楓美子　　西本　緋菜　　横山百々代

【目次】
1　研究対象
1－1　NHK鳥取放送局のラジオドラマについて
1－2　砂川哲夫氏について
1－3　岡本愛彦氏について
1－4　鳥取演劇集団について
2　活動内容
3　「津黒城主の最后」についての調査結果
3－1　物語の舞台となった地域
3－2　物語の舞台としての戦国時代
a）「津黒城主の最后」の典拠
b）義躬の死期と御霊信仰
c）戦国の村における防衛手段
d）城主と家臣および女性との関係性
e）リアリティと想像力
3－3　鳥取の戦後とラジオドラマ
a）戦後の民主化とラジオ
b）鳥取大火と〝ふるさとへの愛情〟
c）ドラマの背景としての隔離政策
4　まとめ

1　研究対象

1－1　NHK鳥取放送局のラジオドラマについて

昭和21（1946）年２月、NHK鳥取放送局放送部長であった竹内忠雄氏の発案により、市民を担い手として、地方局発の番組を放送するための「鳥取放送劇団」が発足した。指導者には、大学で演劇に携わっていた砂川哲夫氏（当時27歳）を迎え、応募者約30名全員が入団の運びとなった。

劇団発足当時、日本はGHQの占領下にあったため、自由な放送は許されず、民主化キャンペーンの一環として、「自治法」や「成人の日」等をテーマとする寸劇が放送された。昭和25（1950）年に、岡本愛彦氏がNHKに入社、鳥取放送局放送課に赴任したことをきっかけに、「因伯千一夜」、「ラジオ家族劇場」、「子供の時間」といった多様なシリーズもののドラマの制作が開始される。昭和28（1953）年には、脚本執筆の体制を固めるため「鳥取放送劇団LGライターグループ」（鳥取放送局のコールサイン・JOLGに由来）が結成された。哲夫氏をはじめとして、従来から脚本を寄稿していた岡田美子氏、小川恒子氏、尾崎清子氏、小谷治子氏、鷲見貞雄氏、鷲見まさ子氏、田賀市郎氏、田中達之助氏、田中正之氏、橋本ゆたか氏、花岡泰次氏、松原久治氏、村出清子氏、山下清三氏、山根優一氏、若木剛氏らが参加した。このように、戦後、NHK鳥取放送局で放送されたラジオドラマの最大の特徴は、脚本執筆・朗読・放送・聴取といった一連の営みを、すべて鳥取に暮らす人々が担っていたことにあると言えるだろう。

「地域調査プロジェクト」のラジオドラマグループは、過去２年間に渡り、哲夫氏の御子息である砂川孝夫氏と、放送劇団一期生である秋山韶亮（よしすけ）氏からお借りした38編の脚本を研究対象として、活動を展開してきた。（38編の脚本のリストおよび本文は、『戦後NHK鳥取放送局ローカルラジオドラマ脚本集』〈鳥取大学地域学部　2019年３月刊行〉に収録されている。また２年間の調査結果については、『地域文化調査成果報告書』〈2016・2017年度　地域学部地域文化学科〉を参照されたい。）その成果をふまえ、今年度は「因伯千一夜　第四十五夜　津黒城主の最后」（1952年10月24日放送）を取り上げ、時代背景の調査、物語内容の分析、作品世界の再現を試みることにした。このドラマのあらすじは以下の通りである。

江戸時代の初め、私都（きさいち）（現・鳥取県八頭郡八頭町）にある上下（かみしも）の村では、村人たちが70年前から数年おきに原因不明の疫病に襲われ、祈祷を繰り返して来た。何かの祟りではないかと疑う村人たちに、「気違い婆」と呼ばれる「きく」が、病の謂われを語り出す。70年前の津黒城落城の折、城主・安藤義躬（よしみ）は但馬に落ち延びようとして傷を負い、下の村の「きく」の家に助けを求めた。献身的な介護への礼として、「きく」の父・五助に銀の小柄、「きく」に愛用の金の茶碗を授けた義躬は、必ず「きく」を迎えに来ることを約束し、五助に教えられた但馬への抜け道を急いだ。しかし、行く手を先読みした上の村の者たちの落ち武者狩りに遭った義躬は、五助と「きく」に欺かれたと誤解したまま、駆け付けた親子に「死して鬼と化し子々孫々に到るまで悪病をもつて復讐するぞーッ」という断末魔の呪いを遺しこの世を去るのである。

まず、「津黒城主の最后」の脚本を執筆した砂川哲夫氏、演出を担当した岡本愛彦氏について紹介する。

1－2　砂川哲夫氏について

哲夫氏は、大正８（1919）年に樺太に生まれ、小学生の時にご家族とともに鳥取に移り住まれた。昭和14（1939）年から17（1942）年まで法政大学文学部英文芸学科に在学。朝鮮人学生から劇研究会の代表を頼まれ引き受けたことをきっかけに（朝鮮半島をはじめとする植民地への差別意識から、日本人しか代表を務めることが許されなかったため）、演劇にのめり込んでいった。「卒業後戦場に送られても、万一生きながらえて復員した場合には即刻プロ（俳優以外の）としてこの世界で生きて行きたいとひそかに決意」するまでになったという（砂川哲夫「演劇を外せば私の人生はない―鳥取演劇集団

四十七年の歩み―」〈『鳥取文芸』第15号　1993年11月〉)。はたして、哲夫氏は太平洋戦争下の昭和17（1942）年に学徒動員され、敗戦を経て鳥取に復員された。

昭和21（1946）年より、鳥取放送劇団の朗読の指導と脚本執筆を担われ、翌年からは鳥取県庁職員としての仕事も始められた。本業を持ちながらも、鳥取の文化の振興に尽力された哲夫氏の功績に対しては、文化庁功労者表彰、鳥取市文化賞、文部大臣表彰、鳥取市政功労者（文化）、鳥取県文化功労者等、数多くの賞が与えられ、平成25（2013）年に94歳でこの世を去られた。

1－3　岡本愛彦氏について

岡本氏は、大正14（1925）年に、鳥取県岩美郡岩美町出身である岡本新市氏の長男として、朝鮮半島に生まれた。昭和４（1929）年から13（1938）年春までを台湾花蓮港で過ごし、大連へと移り住んだ。昭和18（1943）年に関東州立大連第三中学校を卒業すると、家計の困窮により学費の要らない陸軍予科士官学校に入学。翌年航空士官学校に進学し、新潟県高田市（現・上越市高田）で敗戦を迎えた。

戦後は、母親の実家である岩井屋旅館に半年間滞在し、上京して慶応義塾大学経済学部に入学。昭和25（1950）年、卒業と同時にNHKに入社した。間もなく鳥取放送局放送課に赴任した岡本氏は、昭和29（1954）年に大阪放送局に異動になるまで、哲夫氏とともに、「因伯千一夜」シリーズをはじめとするラジオドラマの制作に没頭した。

昭和32（1957）年にTBSに移籍、「私は貝になりたい」（1958年）、「いろはにほへと」（1959年）でそれぞれ第13回、第14回芸術祭大賞を受賞した。昭和38（1963）年にフリーに転身し、平成16（2004）年に79歳でこの世を去られるまで、社会派の演出家・記録映画監督・ジャーナリストとして、定評のある映像作品を数多く制作した。

1－4　鳥取演劇集団について

昭和21（1946）年７月、哲夫氏は、鳥取放送劇団のメンバーを母体として、鳥取演劇集団を立ち上げた。GHQによって作られた軍政隊の監視の下、本格的なラジオドラマの放送が開始されず、劇団員から不満の声が聞かれはじめたことがきっかけであった。

NHK局舎を離れ、近代文学の名作を台本として取り上げ始めた演劇集団は、昭和21年11月に鳥取市で行われた文化祭において、初めて詩（萩原朔太郎「女よ」等）と脚本（田中千禾夫「山下氏の手柄」）の朗読を披露した。哲夫氏は、戦時末期から鳥取に疎開していた劇作家、田中千禾夫・澄江夫妻との交流の中で、演劇集団を育んでいった。昭和23（1948）年には、戦後の退廃した生活環境の刷新を企図した「移動大学」（鳥取県主催）の一環として、小学校校舎で北條秀司「終列車の客」を上演。同年６月には、鳥取商工会議所階上ホールにおいて待望の旗揚げ公演を成功させた（岸田国士「命を弄ぶ男二人」、「母の思想」〈原作・佐藤道子「毀れた花瓶」〉上演）。鳥取市民が、芸術性の高い新劇に触れる貴重な機会を提供することで、敗戦後の価値観の転換を受け入れる素地の形成に寄与した。

鳥取演劇集団は、現在も哲夫氏の遺志を受け継ぎ活動を続けている。

2　活動内容

平成30（2018）年４月、私たちは、因幡・伯耆地方に古くから伝わる民話・伝承をモチーフとした「因伯千一夜」シリーズを精読することから、活動をスタートさせた。「因伯千一夜」は、昭和26（1951）年12月から１年間、毎週金曜日の午後６時台に15分間放送された、１話完結のドラマシリーズである。岡本氏が企画・演出を担当し、哲夫氏をはじめとするLGライターグループの書き手たちが脚本の多くを執筆した。

最初に、現存している14編の脚本の素読み（出来るだけ感情を込めずに音読する）を行い、ドラマの内容を正確に把握した上で、物語の解釈や調査の必要な事項を挙げ、再現する上でのメリット・デメリットについて話し合った。次に共有した意見をふまえた上で、各自が感情を込めて朗読した。この作業を積み重ねた結果、私たちは、安陪恭庵編『因幡誌』（1795年）に記載されている、津黒城主にまつわる伝承をふまえて執筆された「第四十五夜　津黒城主の最后」（1952年10月24日放送）を考察・再現の対象として選んだ。理由としては、伝承には登場しない「きく」という架空の人物の、過去と現在の豹変ぶりに惹き込まれた、城主・安藤義躬と家臣・髙山隆介の掛け合いの場面に心が惹かれた、登場人物の数や男女比等の観点から、再現可能であると感じたこと等が挙げられた。

６月から７月にかけて、松本健一氏（ギャラリー栄光舎代表）にご指導いただきながら、朗読の練習を行った（図１）。松本氏は、高校生の時にNHK鳥取放送劇団に入団、劇団青俳や鳥取演劇集団で俳優・演出家として活躍され、現在は「朗読ひまわりの会」を指導されている。

図１　練習風景

８月に台詞の録音を終えると（図２）、効果音やBGMを挿入し、音量・間を調整することで15分の作品に仕上げていく編集作業を行った。

図２　録音風景

一方で、①作品の舞台となった地域、②物語の中に描かれた時代、③ラジオドラマが放送された時代について、地理班・戦国班・昭和班に分かれ、調査・考察を行った。９月28日には、地理班の調査を深めるために八頭郡にフィールドワークに出かけ、作中に登場する場所や建物の現在の姿を確認するとともに、現地に暮らす方々からお話を伺った（本稿「３−１」参照）。

11月26日には、鳥取県立公文書館を訪ね、県史編さん室室長である岡村吉彦氏に、戦国班が抱いた疑問についてご教示いただいた（本稿「３−２」参照）。

12月９日には、活動の成果を広く市民の方々に知っていただくために、「ラジオドラマ再発見　かつて鳥取でつくられ、鳥取で聴かれたエンターテインメント　魅力ある音の世界がいま、甦る」と題するイベントをenetopia plaza（鳥取ガスショールーム）で開催した（図３）。

第１部では、学生が「津黒城主の最后」について調査・考察した内容を発表し、再現した作品をご視聴いただいた。第２部では、松本健一氏と今本明子氏（朗読ひまわりの会）に「因伯千一夜　第二十七夜　天女」（1952年６月20日放送）の朗読をご披露いただき、３名の教員が鳥取放送局のラジオドラマについての研究成果を発表した。当日は悪天候の中、53名の方がご来場下さり、多くの方がアンケートに答えて下さった。来場者の所属については、会社員７名、公務員２名、大学生１名、教職員１名、その他20名、イベントを何で知ったかについては、知人からの紹介17名、新聞記事10名、チラシ５名、その他３名という回答が得られた。自由記述欄には、一般的に広く知られている「羽衣天女」伝説と、ラジオドラマ「天女」の相違についてのご指摘も見られた。来場者の多くは、ご自身の暮す地域の歴史に強い関心を持たれており、その興味は多岐にわたることから、来場者の視点で発表の仕方や構成を工夫することの大切さを痛感した。全体として、イベントに満足したという声をいただくことができ、開催した意義を実感することができた（図４）。

図３　イベント会場の様子

図４　イベント終了後の集合写真

イベントについて３紙から取材を受け、記事を掲載していただいた（「鳥取大学地域学部の取り組み「ラジオドラマ再発見」」〈『日本海新聞』2018年11月13日〉、「県発　戦後ラジオ劇再演」〈『読売新聞』2018年11月17日〉、

「支局長からの手紙　ラジオドラマ」〈『毎日新聞』2019年１月13日〉)。

平成31（2019）年１月26日には、「国際地域文化調査成果発表会」において、上記イベントの反省を活かして再度発表を行い、希望者には「津黒城主の最后」のCDを配布した。

私たちが再現を試みた「津黒城主の最后」は、YouTube（https://www.youtube.com/watch?v=gZwv5mZkYpk）でも公開しているため、ご視聴いただければ幸いである。

３　「津黒城主の最后」についての調査結果

ここからは、ラジオドラマ「津黒城主の最后」について、舞台となった地域、登場人物が息づく中世、ドラマが放送された昭和27（1952）年の時代状況という３つの視角から、調査・考察したことを紹介する。

３−１　物語の舞台となった地域

ここでは、物語に所縁（ゆかり）のある場所と建造物（①諸鹿谷（もろがだに）、②来見野橋（くるみのばし）、③来見野神社、④安藤八幡宮、⑤市場城（いちばじょう）、⑥津黒城、⑦津黒神社、⑧殿屋敷、⑨大樹寺）について、主としてフィールドワークから知り得た内容を報告する。物語の舞台は、現在の鳥取県八頭郡であり、①〜④は、若桜鉄道の終着駅である若桜駅からほど近い所に位置している（図５・６）。

図５　①〜④の位置

図６　①〜④の位置（拡大）

⑤〜⑨の位置は、下の地図（図７・８）に示した通りである。

図７　⑤〜⑨の位置

図８　⑤〜⑨の位置（拡大）

図９　諸鹿谷の入り口

図10　義躬が落ち武者狩りに遭ったと考えられる地点

①諸鹿谷は、戦に敗れた津黒城主・安藤義躬が但馬へ抜ける通過点となるはずであった谷である。現在は通行

止めになっており、なだれ注意の標識が見られる（図９）。義躬は諸鹿谷を抜けることなく命を落とすが（図10）、もし生き延びていたならば、これに似た景色をその目に映していたのだろうか。

義躬が落ち武者狩りに遭い、命を落とした場所である②来見野橋については、文献調査では有力な情報が得られなかったため、諸鹿を流れる来見野川のどこかに架けられているのではないかと推測し、川沿いを行くと見つけることができた（図11）。

図11　来見野橋

橋には「昭和五十六年二月竣功」と刻まれており、塗装も真新しかったことから、「津黒城主の最后」が放送された昭和27（1952）年当時、ひいては義躬が無念の死を遂げた戦国時代には、現在とは違った姿を見せていたことだろう。

来見野橋から300mほど道沿いを行くと、杉林に囲まれるようにして、ひっそりと来見野神社が建っている（図12）。境内には、４枚の石を組み合わせた祠（ほこら）があり（図13）、一見したところ何を祀るためのものかわからないが、『若桜町誌』（鳥取県若桜町　1982年）や野津龍『鳥取県伝説集（上）因幡編』（山陰放送　1989年）によれば、これこそ義躬の霊を鎮めるために築かれた安藤八幡宮にほかならない。

図12　来見野神社

図13　安藤八幡宮

⑤～⑨の位置を特定するにあたっては、吉田淺雄編『因幡國私部（いなばのくにきさいち）市場城誌』（燈心亭文庫　1985年）を参照した。この書籍には、編者が膨大な知識と実地踏査をもとに作成した、市場城付近の詳細な手書きの地図が収録されている（図14）。

図14　『因幡國私部市場城誌』

⑤市場城（私都城・私部城）は、安藤義躬が仕えた毛利氏の城であり、毛利豊元が城主であった天正９(1581)年に落城したとされる（跡地は険しく、足を踏み入れることができなかった）。市場城とその支城である⑥津黒城は、安土川を挟んで向かい合うように位置している（図15）。

図15　市場城と津黒城

津黒城の跡地である小山を登って行くと、頂上に一本の大木がそびえ立っていた。根元には五輪塔が集められ、生花が手向けられており、神聖な雰囲気を漂わせていた（図16）。

図16　津黒城跡地

この城跡の近くに⑦津黒神社がある。『鳥取県神社誌』（鳥取県神職会　1934年）には、来見野神社や諸鹿神社の名は見られるが、津黒神社についての記載はなく、津黒城や安藤義躬との関係性は不明である。

安藤義躬の居屋敷（⑧殿屋敷）があったとされる場所は、現在私有地となっており、植物が栽培されていた（図17）。

図17　殿屋敷跡地

そこからは津黒の集落を一望することができ、義躬が眺めた風景に思いを馳せることができた。

⑨大樹寺は、安藤義躬の菩提寺であり、「安藤家累代之墓」と彫られた墓（図18）の前に、義躬その人の墓が安置されていた（図19）。

図18　安藤家の墓

図19　安藤義躬の墓

ご住職にお話を伺うと、義躬の墓ははじめ扇ノ山（おうぎせん）の麓に広がる広留野（ひろどめの）に作られたが、今から３年前に、義躬の子孫にあたる方の意向により、大樹寺に移されたとのことである。

「津黒城主の最后」は、約450年前の八頭を舞台とした物語だが、現地を歩いてみることで、思いのほか地形には変動がないことに気づかされた。また、戦国の城をめぐる正確な地図を作成した吉田淺雄氏や、義躬の死を語り伝えて来た人々によって、当時と現在が地続きの時空間として存在し得ていることを実感した。

３−２　物語の舞台としての戦国時代

安藤義躬は、戦国時代に実在したと考えられる武将であるが、その詳細を記した資料は存在せず、彼の死にまつわる伝承が残されているのみである。そこで私たちは、以下の①～⑦の文献を参照した上で、平成30（2018）年11月26日に、鳥取県立公文書館県史編さん室室長である岡村吉彦氏に、義躬の生きた時代についてご教示をいただいた（図20）。

① 安陪恭庵編『因幡誌』（1795年）
※佐伯元吉編『因伯叢書（第三冊）復刻版』（名著出版　1972年）参照。
② 渡辺光正編『因幡伝説民話　第四集』（渡辺光正　1980年）
③ 『若桜町誌』（鳥取県若桜町　1982年）
④ 野津龍『鳥取県伝説集（上）因幡編』（山陰放送　1989年）
⑤ 藤木久志『戦国の村を行く』（朝日選書　1997年）
⑥ 藤木久志『新版　雑兵たちの戦場　中世の傭兵と奴隷狩り』（朝日新聞出版　2005年）
⑦ 鳥取県立公文書館県史編さん室編『鳥取県史ブックレット１　織田vs毛利―鳥取をめぐる攻防―』（鳥取県　2007年）

図20　岡村吉彦氏

ａ）「津黒城主の最后」の典拠

「津黒城主の最后」を執筆した砂川哲夫氏が、どのような文献を参照されたのかは確認できていないが、義躬の伝承を記した最も古い文献と考えられる①『因幡誌』の次のような内容は、概ねドラマの筋書きと対応している。天正年中の津黒城落城の折に、城主・安藤義光（義躬）は、単騎で但馬へ落ちのびる途中に通りかかった来見野村で餓えて動けなくなり、民家に入って一飯を乞うた。義光を憐れんだ村人は食事を与え、諸鹿村付近は危険であるとして、但馬への抜け道を教えた。義光は深く感謝し、白銀の茶碗を村人に与え、教えられた道を急いだ。しかし、褒美の噂を聞きつけ、先回りした諸鹿村の民による落ち武者狩りに遭った義光は、７人までを切り伏せたが、８人目の太郎右衛門という人物に討たれてしまう。義光は、「吾此の怨念悪疾となりて永く汝か子孫に報ひ我名の一字を殘さん」と言い残して亡くなったため、以来この地には「癩病」（「我名の一字とは義と癩と訓同き故歟」という編者の注記が挿入されている。）が絶えなかった。義光の霊が村民に詫びて「此領分へ祭祀せよ」と願ったため、広留野に安藤八幡宮が築かれた。

②『因幡伝説民話　第四集』は、編集方針が詳らかにされていない私家版の書物である。津黒城落城時、「義窮（ママ）」は家来とともに城を抜け出すが、敵に追われて逃げ惑う内に一人になり、やむなく但馬を目指した。「赤松谷の奥の来見峠」にある農家で「おかゆ」を食べさせてもらい、お礼に銀の茶碗を与えて立ち去った。落ち武者狩りに遭った「義窮（ママ）」が呪いを残して亡くなり、「諸岡（ママ）村」に「悪い病」が流行ったという展開は共通しているが、「義窮（ママ）」の霊を祀るエピソードは記されていない。

④『鳥取県伝説民話集（上）因幡編』は、小泉友賢編『因幡民談記』（1688年）や①『因幡誌』の内容を、現地の「古老」からの聞き取りに照らして補足・訂正しつつ編纂された書物である。④では、①②と共通する物語内容に加え、落ち武者狩りに遭った義躬が「金の杯」を取られまいとして来見野川に投げ入れ、それが流れ着いた所に自分を祀って欲しいと願ったため、その地に安藤八幡宮が築かれたとしている。義躬の死後流行り始めた病は「諸鹿よし」（ハンセン病）と呼ばれ、村民を苦しめたとされる。

哲夫氏が①を参照したことはほぼ間違いないように思われるが、ドラマでは義躬の死後村人を苦しめた疫病を「癩病」とは明記しておらず、村人が義躬の霊を祀ったエピソードはカットされている。代わりに、オリジナルの登場人物と考えられる「高山隆介」や「きく」と義躬の別れのシーンがドラマチックに描かれる。義躬が五助「きく」親子に与えた御礼の品（「銀の小柄」と「金の茶碗」）は、①②に見られる「銀の茶碗」や④に登場する「金の杯」といった伝承内容からヒントを得たものであろう。

次節以降、伝承とドラマの背景、それらの差異が意味するものについて掘り下げてみたい。

ｂ）義躬の死期と御霊信仰

①『因幡誌』において、義躬の死は天正年中の出来事とされているが、その具体的な死期として次の二説が考えられる。

Ⓐ天正２～３（1574～1575）年　尼子氏と毛利氏の戦い

Ⓑ天正８～９（1580～1581）年　毛利・山名氏と織田氏の戦い

まずⒶについてだが、③『若桜町誌』掲載の年表には、天正２（1574）年、「私都城主安藤氏但馬に遁れんとして諸鹿の土民に殺される。」と記されている。⑦『鳥取県史ブックレット１　織田vs毛利』に拠れば、1560年代には、因幡・伯耆を支配してきた尼子氏と、そこに侵攻した毛利元就の軍との間で攻防戦が繰り広げられていた。永禄９（1566）年、富田城主尼子義久が毛利軍に降伏すると、毛利氏優勢となるが、天正元（1573）年には、尼子再興の兵を挙げた勝久が鳥取城・市場城・若桜鬼ヶ城を攻略、反毛利勢力を味方につけ巻き返しを図った。この時に市場城、およびその支城であった津黒城が落城し、義躬が命を落とした可能性がある。

次にⒷだが、②『因幡伝説民話　第四集』では、義躬の死は天正９（1581）年の出来事とされており、④『鳥取県伝説集（上）因幡編』においても、羽柴秀吉による因幡攻めの折に命を落としたとされている。⑦『鳥取県史ブックレット１　織田vs毛利』に拠れば、天正３（1575）年、毛利氏と但馬山名氏が同盟関係を結び、天正６（1578）年に尼子氏が滅亡、天正８（1580）年には、織田信長が派遣した秀吉軍が姫路城を出発、但馬・因幡への攻撃を開始した（第一次因幡攻め）。秀吉軍は、若

桜鬼ヶ城、市場城、生山城、用瀬城、鹿野城、吉岡城、岩常城の七城を攻略、この時に義躬が命を落とした可能性がある。交通の要所に築かれたこれらの城の落城によって鳥取城は包囲され、秀吉の第二次因幡攻めによる鳥取城陥落（天正９〈1581〉年）へとつながっていった。

岡村吉彦氏によれば、Ⓑの秀吉による第一次因幡攻めにおいては、大軍が一気呵成に攻め上り、殆ど戦わずして鳥取城を包囲するに至ったため、Ⓐの尼子氏と毛利氏の合戦で義躬が命を落としたと考えるほうが、ドラマの雰囲気に合っているのではないかとのことであった。

また、義躬の死後、村に起った疫病（ハンセン病）を義躬の祟りと捉え、その霊を祀る安藤八幡宮を築いた村民の行動には、御霊（ごりょう）信仰の影響を見ることができる。御霊信仰とは、民衆の生を脅かす天変地異や疫病を、名の知れた死者の祟りと捉えてその霊を祀ることで、災害や病の蔓延を防ぐことができると考える風習である。岡村氏によれば、赤松広秀の霊を祀った赤松八幡宮（かつて鳥取市湯所町に存在）などの例から、因幡にも御霊信仰が浸透していたと考えられるが、疫病がハンセン病であったかどうかは定かではない（中世における「癩者」は「えた・非人」の身分に貶められ、一般社会から隔離されていた）。当時の来見野村近辺の疫病の記録は残されていないが、「津黒城主の最后」に描かれた疫病は、その病状（７年前に５、６人が血を吐いて死亡、３年前の春に熱病が流行り、物語の現在において元気であった者が次々に急死）からハンセン病とは考えにくい。またドラマの中で、村人たちは疫病が起こるたびに堂に籠り、法華太鼓を鳴らし祈祷を上げてきたとあるが、当時この地域で法華宗が信仰されていたかどうかは不明であり、土地に根差した村落信仰の一形態として描かれているのではないかとのことであった。

ｃ）戦国の村における防衛手段

「津黒城主の最后」の見せ場の一つに、義躬が武装した農民たちによる落ち武者狩りに遭い、命を落とす場面がある。勝者と敗者が目まぐるしく入れ替わる戦国時代において、武士と農民はどのような関係を築いていたのだろうか。⑤『戦国の村を行く』と⑥『新版　雑兵たちの戦場　中世の傭兵と奴隷狩り』、および岡村氏に伺ったお話に基づいて説明する。

中世の村では、２つ以上の勢力がせめぎ合っている場合、形勢を慎重に見極め身を処すことが、戦火から身を守るために不可欠であった。防衛手段の一つとして、攻め入って来た敵軍から禁制札を買い、村で暴虐・略奪を行わないことを約束してもらう方法があった。秀吉による第一次因幡攻めの際も、通り道にあたる村の中には、秀吉に金銭や年貢、情報の提供を申し出ることで平安を守った村があった。また、拮抗する２つの勢力の支配圏の境目に位置する村は、「半納」という手段を用いることがあった。これは、服従を迫る両勢力に対し、年貢の半分を納め、敵方の情報を提供する代わりに、残り半分の年貢の免除と村人に危害を加えないことを約束させ、束の間の平和を守ろうとしたものである。伯耆や美作、備中には、この手段を講じた村が存在するが、秀吉はどっちつかずのこの態度を嫌ったという。いざという時には、農民は村を支配する領主の城に逃げ込んだり、自ら築いた山城に立て籠もることもあった。

村の若い男性たちは、領主の要請により、雑兵（ぞうひょう）として戦に参加することもあったが、軍功を上げても褒美はもらえないため、戦場で物資や人間の略奪を行った。こうした行動は、兵の士気を保つために見過ごされることが多かったという。また、敗者となった武将に対する落ち武者狩りも、落ち武者が村で狼藉を働くことを防ぎ、逆に鎧兜等を奪って金品に替えるべく積極的に行われた。

よって、「津黒城主の最后」において、義躬が単騎で但馬へと落ちのびようとしたことは、極めて無謀な行為であったと言える（こうした場合、身を窶（やつ）し、誰も知らない道なき道を行くといった方法が取られた）。また、義躬が「頼もう！頼もう！お願いでござる」と農家の戸を叩き、助けを求める行為も危険なもので、通常は家臣が先に村に入り、敵か味方かを嗅ぎ分けて城主を招き入れるか、家臣を失った城主は、神社や庵（いおり）などのアジールに身を隠すことが多かった。

岡村氏によれば、義躬が来見野村に立ち寄った時期がⒶであった場合、この村が尼子方であったか毛利方であったかは定かでないが、Ⓑであった場合は、毛利方でなく秀吉方であった可能性が高いという。よって、五助「きく」親子が、毛利方の落ち武者である義躬を匿うことには、相当な覚悟が必要であったと考えられる。そのような命がけの善意に対する御礼として、義躬は換金性の高い「銀の小柄」と「金の茶碗」を授けた。ちなみに、比較的小さな城の城主が、純金・白銀の道具を所持し、敗走するにあたって携帯していたことは考えにくい。ただ、当時の名立たる武将が茶道（ちゃどう）を嗜み、螺鈿（らでん）や漆（うるし）の細工が施された名器を集め、軍功を上げた家臣に褒美として与えていたことはたしかである。敵方の、しかも敗者である義躬が高価な道具を身につけていることを聞きつけた村人たちが、落ち武者狩りに繰り出したのは止むなきことと言えるだろう。

ｄ）城主と家臣および女性との関係性

私たちが「津黒城主の最后」を読み、魅力を感じたポ

イントの一つに、二人の架空の登場人物（義躬の家臣・髙山隆介と、義躬の恋人「きく」）と義躬との関係性の描かれ方がある（「きく」はもちろん、髙山隆介の名も歴史資料には見られない）。この背景について、岡村氏からご教示いただいたことをまとめる。

私たちは、義躬と隆介の配役を決め、演じていく上で、壮年のイメージのある城主に箔をつけるために、隆介は義躬よりも年下であると想定した。しかし実際には、城主の威厳を保つために家臣が年下である必要はなく、むしろ隆介は城主となるべき義躬が幼少の頃から養育係を務め、後に家老として彼を支えて来た人物と考える方が自然であることがわかった。と言うのも、ドラマの中で隆介は、義躬に但馬への抜け道を教えた上で、城主の身代わりとして名乗りを上げ、敵を引き付けて義躬を逃がす。この場面は、隆介が義躬よりもこの地域の地理に通じていること、隆介の進言に義躬が素直に従うほど二人が信頼関係で結ばれていること、隆介の首級を上げることが敵にとって手柄になる程度に彼が名の知れた武士であったことを示している。武田信玄の軍師・山本勘助や、秀吉の軍師・黒田官兵衛のように、隆介は津黒城に「その人あり」と認められた人物として造形されていることがわかる。

一方、義躬は献身的な看病をしてくれた「きく」に、「志を果した後には」「迎えに参りたい」と伝え、結婚の約束をして出立する。秀吉が兵農分離を進める以前の社会では、武士と農民の間に厳格な境界線は存在せず、両者が婚姻関係を結ぶことも可能であった。とはいえ城主ともなれば、正室は主君や親が主導する政略結婚によって迎えるため（正妻は、同盟関係にある家から送られる人質兼スパイであった）、自分好みの女性を側室としてそばに置き寵愛した。ドラマの中で、義躬が自分に裏切られたと信じたまま死んでいったことに苦しみ、発狂した「きく」に対し、同じ村の女性たちが悪意をまじえた噂話をする場面がある。実現しなかったとはいえ、一国の城主が心優しい「きく」に懸想し、側室に迎えようとしたことは、貧しい村の女性たちの嫉妬心を刺激したのだろう。

このように「津黒城主の最后」は、名誉への憧れや忠誠心、恋愛感情や嫉妬といった、現代人にも通じる人間らしい感情が、不安な時代の一城主の周囲に渦巻いていたことをうかがわせる。

e）リアリティと想像力

近世後期に編纂された①『因幡誌』に見られる義躬の伝承と、昭和27（1952）年に放送された「津黒城主の最后」を読んだ時、私たちは両者がともに、義躬を匿った村人を〝善人〟、殺害した村人を〝悪人〟として描き出しているように感じた。先に確認したように、戦国時代の村において、飢え傷ついた落ち武者が民家を訪ね、訪ねられた農民が不用意に彼を匿うことはあまりに危険な、非現実的ふるまいであった。そうした隙に付け込み、落ち武者の命と金品を奪い取ることこそ、農民が自己の生命と生活を維持するための現実的な行動であったといえる。そのような戦国時代のリアリティは、戦が〝非常事態〟となった近世期に失われ、失われたことが昭和の十五年戦争を招き、敗戦後の民主化の過程で再び忘れられる。

戦争を知らない現代の読者は、命がけで義躬を救おうとした五助「きく」親子と、同じく命がけで落ち武者狩りに向かった村人たち双方の想いと行動を、善玉・悪玉といったキャラクターのそれとしてでなく、想像する力を培う必要があるのではないだろうか。

3−3　鳥取の戦後とラジオドラマ

ここでは、「因伯千一夜」シリーズ、およびその一作である「津黒城主の最后」が、戦後の鳥取で、聴取者にどのようなメッセージとして響いたのかを考察したい。

a）戦後の民主化とラジオ

昭和20（1945）年９月２日より、国際法に基づき日本はGHQの統治下に置かれた。占領の基本的な方針は、「軍国主義の排除」と「民主主義の育成」であった。これらを達成するために、GHQはCIE（民間情報教育局）を設け、放送の管理と日本人の再教育を行った。同年12月、CIEが制作したラジオ番組「真相はかうだ」の放送が開始される。その内容は、日本の政治家や軍人が隠蔽していた戦争の「真実」を、国民に向けて暴露するものであった。

一方、GHQはCCD（民間検閲支隊）を設け、メディアの検閲を行った。昭和20（1945）年９月には、占領軍に関する報道を厳しく制限する「日本に与ふる放送準則」（通称「ラジオコード」）が発令され、占領政策を批判する表現や、占領軍に対して不信を抱かせるような報道を一切禁止した。

占領軍批判以外の表現には寛容であったGHQは、昭和25（1950）年６月、「言論の自由」を保持するために、新憲法に即し放送の在り方を定めた「放送法」を施行した。これにより、昭和26（1951）年４月21日に、全国16社に民放の予備免許が公布され、翌年10月までに16局が開局した。民放で放送されたラジオドラマの脚本を執筆していた永来重明氏、田中千禾夫氏、鴇田忠元氏、菜川作太郎氏らは、NHK鳥取放送局にも脚本を提供している。

昭和26（1951）年９月８日、日本はサンフランシスコ

講和条約を結び、翌年GHQによる占領が終了する。NHKと民放の共存時代の幕開けである昭和27（1952）年には、ラジオの受信契約数が1000万件を突破、ラジオは黄金期を迎える。しかし昭和28（1953）年にテレビ放送が開始され、60年代にかけて日本が高度経済成長期に入ると、ラジオは次第に個人聴取の傾向を強めていった。NHK鳥取放送局のラジオドラマは、（現存が確認されている脚本の日付より）テレビがメディアの主流となる70年代初頭まで続けられたものと考えられる。

ｂ）鳥取大火と〝ふるさとへの愛情〟

「因伯千一夜」は、昭和26（1951）年12月から１年間放送されたドラマシリーズであり、「津黒城主の最后」が放送されたのは昭和27（1952）年10月24日、鳥取市が大火に見舞われた半年後のことであった。

昭和27（1952）年４月17日午後２時55分、鳥取市吉方町の市営動源温泉付近から出火した火は、最大瞬間風速15mもの南風に煽られて市内の各所に飛び火。翌18日午前３時頃に鎮火されるまで約12時間燃え続けた。この火災により、鳥取市街地は空襲を受けた後のように一面焼け野原となったが、NHK鳥取放送局は延焼を免れた。下の写真（図21）の手前に流れるのが袋川、奥に見えるのが放送局の鉄塔である（この局舎は、現在と同じ鳥取市寺町に建っていた）。

図21　NHK鳥取放送局の鉄塔と避難する人々

大火直後、鳥取放送局がどのような放送を行ったのかは記録されていないため、井上浚『報道で綴る鳥取大火災』（螢光社　2011年）に収録された新聞記事の中から、印象的なものを拾い上げてみたい。

４月19日の毎日新聞には、「戦争でいためつけられ、地震にも丸ハダカになりようやく一息というやさき、また今度の火事で十七年間の努力も水のアワとなりました。」という市民の声が掲載されており、４月24日の日本海新聞には、「避難所、臨時避難所（中略）の生活はすべての点で不自由を極める」とある。鳥取地震が起きたのは、太平洋戦争下の昭和18（1943）年９月10日のことであり、戦災・震災からの復興のただなかにあった人々を大火が襲った。戦争・地震・大火によって財産や生活の場、かけがえのない他者を失った人々は、自身が生きのびた喜びも感じられないほど打ちのめされていたことがわかる。

しかしそのような嘆きの声に抗うように、記者が被災した市民の復興への態度を、「不死鳥」や「フェニックス」という言葉で繰り返し表現していることに気がついた。実際に、４月25日の日本海新聞には、八頭郡若桜中学校３年の女子生徒一同が、修学旅行の小遣いを節約して鳥取市復興のために拠金したことが、４月28日の日本海新聞には、倉吉市に住む匿名の少女から、観たい映画を我慢して貯めた見舞金と、「一日でも早くもとどおりの鳥取市を復興して下さい」という見舞状が贈られたことが紹介されている。

これでもかと襲ってくる苦難に打ちひしがれても、未来を担う若い世代に背中を押されるようにして、何度でもよみがえる「不死鳥」のような街――。新聞というメディアによって、大火後の鳥取に醸成されたそのような物語は、「因伯千一夜」シリーズの冒頭で、アナウンサーによって語られる番組の趣旨（「私達の祖先の生活の中に生れそして口伝てに伝えられた伝説、私達が母の胸で目を輝かせて聞いた香り豊かな伝承　そうした古い昔話は、今もなを、私達の胸にふるさとえの限りない愛情をよみがえらせてくれます」）と響き合う。変わり果てたふるさとの姿を目の当たりにした人々が、〝ふるさとへの愛情〟を実体化する物語に心惹かれるのを止めることはできない。４月25日の日本海新聞に掲載された、「焼け残ったオルガンを焼跡に引き出しかなでる讃美歌」が、復興作業にあたる市民を元気づけたという記事や、おとぎ話に聞き入る幼児たちの笑顔が、焼跡整理に追われる母親たちを喜ばせたという記事もまた、人間がどのような時に物語を求めるのかを示している。

しかし、「郷愁」を喚起する冒頭の語りとは裏腹に、「因伯千一夜」の諸作には、他者への不信や憎悪、裏切りや暴力を描いた救いのないストーリーが目立つのも事実である。次節では、「津黒城主の最后」を枠取る〝暗さ〟が、どのような社会構造に由来するものなのか考えてみたい。

ｃ）ドラマの背景としての隔離政策

「３−２」で言及したように、「津黒城主の最后」の典拠の一つと考えられる『因幡誌』には、義躬の死後村人を苦しめた疫病が「癩病」（ハンセン病）であると記されていた。そこで、ドラマ放送当時のハンセン病をめぐる状況を確認しておきたい。

昭和６（1931）年４月に制定された「癩予防法」（法

律第五十八号）は、「患者の療養所入所資格」を「拡大」し、事実上すべての患者を隔離の対象とした。併せて、「患者が病毒伝播のおそれのある職業に従事すること」を「禁止」、自宅療養患者の地域における生活基盤を奪った。以後、戦中から戦後にかけて、鳥取県においても隔離政策（「無らい県運動」）が推進された。昭和11（1936）年、鳥取県は、岡山県邑久（おく）町にある国立ハンセン病療養所・長島愛生園の敷地内に、鳥取出身の患者を収容する「鳥取寮」を設立するため、県民に寄付を募った。この寄付は、県の厳しい財政状況を反映した半強制的なものであり、大火後の復興のための子どもたちの募金が自発的なものであったのと対照的である。昭和13（1938）年３月、「鳥取寮」落成式が行われた。昭和27（1952）年当時、長島愛生園の入所者は1,580名であり、その内鳥取県出身者は52名であった（鳥取県立公文書館県史編さん室編『鳥取県史ブックレット２　鳥取県の無らい県運動―ハンセン病の近代史―』〈鳥取県　2008年〉参照）。

NHK鳥取放送劇団のメンバーを母体として立ち上げられた鳥取演劇集団は、県からの要請を受けて、昭和27（1952）年から29（1954）年の間に３回、長島愛生園と邑久光明園で慰問公演を行っている（図22）。

図22　長島愛生園の「恵の鐘」前で記念撮影する劇団員

哲夫氏は１度目の訪問について、「２泊３日の岡山県遠征は生涯忘れられぬ印象となった」と記している（砂川哲夫編『鳥取演劇集団30年小史』1978年）。

前節では、戦争や地震、大火によってかけがえのない存在を失ったことが、鳥取の人々のふるさとへの愛着を強めていたことを確認したが、全く同じ時期に、その大切なふるさとからハンセン病者を排除することで、隔離対象者を愛着のある人や場所から引き離すという、矛盾した行為が行われていたことがわかる。

そして、哲夫氏が初めて愛生園を訪問した４か月後に執筆された「津黒城主の最后」にも、病者に対する排除の問題が影を落としているように思われる。作中で、「恐しいことだなあ」「明日はわが身ぢや」と言い合いながら疫病に怯える村人たちは、伝染病者を隔離する（あるいは伝染病者として隔離される）ことで、近親者と生き別れる不安、そして最終的には死に別れる恐怖に苛まれつつ生きているのではないだろうか。しかし、そのような不安を抱えた村人たちは、70年前の戦でかけがえのない存在を失った「きく」を「気違い婆」と呼び、彼女の語りに耳を傾けようとはしない。

このように、いつの時代も人間は、かけがえのない存在や地域に執着しながら（あるいは執着するがゆえに）、他者からそれらを奪おうとすることがある。敗戦後の民主化と「無らい県運動」が矛盾なく遂行されたことが示すように、民主主義という概念は必ずしも、排除された者の苦しみへの想像力や、排除の欲望を抑制する力を育むものではない。民主化キャンペーンを担う一方で、「因伯千一夜」という悲喜劇を執筆した哲夫氏は、人間が自己の生に執着することを肯定すると同時に、そのエネルギーが他者の生を侵害していないかを問い直す心の働きを、聴取者が感じられるよう願っていたのではないだろうか。

4　まとめ

この度の調査・活動を通じて最初に感じたのは、鳥取県東部という限られた地域で、１回だけ放送された15分のラジオドラマに、どれだけの知識・労力・想いが込められており、当時の聴取者および今日の読者が、そこからいかに多くのことを学ぶことができるかという驚きであった。特に、今回注目した「因伯千一夜」の一作「津黒城主の最后」からは、戦国時代や昭和の敗戦後という、私たちが生れる以前に鳥取の地に積み重ねられた人々の営みについて教えられ、私たちが見届けることのできない未来がいかにあるべきかを考えさせられた。例えば、普遍性を装った善悪の基準は、いつ誰によって定められ、どのように検討し直されるべきなのか。民主主義という概念・制度が万能なものでないとすれば、個人の精神と生命を尊重し得る社会を築くには何が必要なのか。その時、私たちが手段として求めるであろうラジオを含む様々なメディアは、いかなる可能性と限界を孕んでいるのか。

このような課題と向き合う端緒に立つことができたのは、脚本の原本をご提供下さった砂川孝夫氏、中世の文化と精神世界についてご教授下さった岡村吉彦氏、演技の素人である私たちに、発声から感情の込め方までご指導下さった松本健一氏、イベントで朗読をご披露下さった今本明子氏らのおかげである。この報告書をもって御礼とさせていただきたい。